

■ 会議報告

第14回真空紫外物理国際会議 (VUV-14) 国際諮問委員会 (IAB) 委員長の立場から

菅 滋正 (大阪大学大学院基礎工学研究科)

本年7月19日(月)より23日(金)まで、初めて南半球において豪州のケアンズで開催された VUV では好天に恵まれた会期中は400名を越える参加者が熱心に発表に聞き入り活発な質疑が繰り広げられた。筆者はこの9年間務めた国際諮問委員会 (IAB) 特に2001年8月から3年間務めた VUV14国際諮問委員会委員長の立場で本会議の報告を行いたい。

諮問委員長として第14回の会議をよりよくするために、2002年3月に前回第13回会議に対する全 IAB 委員ならびに名誉委員の意見を取りまとめた。第13回での問題点は幾つかあった。たとえば IAB 委員に対して VUV-13の IAB 委員長から招待講演の推薦依頼が届いたのが開催の約半年前であった。それまでは IAB 委員へのコンタクトは全く無かった。この時点で提案された招待講演者に対して、プログラム委員会からは、既にほとんどの招待講演者は決まっておき、IAB の推薦を入れる余地は無いとのことであった。多くの招待講演がヨーロッパに集中していたのに当時の参加者の方々はお気づきであったろうか？ まとめた改善案は：1) 国際プログラム委員会は email により連絡を取り合い、バランスの取れた (地域と内容) かつ魅力的なプログラムを考えること。2) IAB 委員が実質的にプログラム委員会に招待講演者を提案できるようにすること。3) 提案の最終期限については IAB 委員に事前に周知すること。4) 1年前に約半数の招待講演者を決めて良いが半分の枠はそれ以後まで残しておき話題性のある講演を随時取り込むこと。さらに少なくとも10名程度の招待講演枠は可能な限り直前まであけておくこと。これらを VUV-14の組織委員長である Lewis 教授に公式に伝えた。この他、5) すべての講演、ポスター発表を番号付けすることも強く勧告した。VUV-13の abstract 集を見ると各 abstract の頁の下には番号がついているものの、目次に全く番号が付けられていないために、発表の頁を捜すことが困難だった。6) また招待講演や oral 発表の目次だけでなく、ポスター発表の目次も abstract 集の冒頭にまとめるよう要請した (これは残念ながら今回も見送られた)。7) 論文原稿の提出締切日を明確に周知することも必要である。8) abstract 集の重さ。VUV-13の abstract 集は実に1648 g の重さがあり、これを軽量化することも勧告した。

さて今回 VUV-14では abstract がパソコンに download できた。Abstract 集の重さは828 g とほぼ半減。目次も招待講演、oral 発表のほとんどすべてが番号付けあり。ただポスターセッションでの発表者にとっては、聴衆がすべて



開会式

の頁をめくらないとポスターの title さえも分からないのではいささか士気を喪失するのではあるまいか。ポスター会場については場所によっては極度の照明不足があった。大きく書かれた字でさえ読めない場所があった。追加照明の手配までの気配りが現地の実行委員会に見られなかったのは唯一の心残りである。

プログラムに関しては、昨年秋にすべての IAB 委員に招待講演の推薦依頼が届いた。我が国からは3名の IAB 委員がそれぞれに推薦を行った。もちろんプログラム委員にも推薦依頼が行ったことであろう。今回は J. B. West 教授がプログラム委員長であったが、推薦は組織委員長の Lewis 教授にも返送することとした。今年に入って出てきた招待講演者の予備リストはしかしかなり分野の偏りがあり、多くの IAB 委員が修正を求めた。プログラム委員長の好みからか固体に関する招待講演が極端に少なかったのである。最終的には IAB の意見が反映され結果的に修正がなされ比較的バランスの取れたプログラムになった。

幾つかの国際会議の運営を見てきた立場から組織委員長に対し、ベルの準備が講演時間厳守の必要条件であることを申し入れたが、実際にほとんど遅れることなく進行したことは喜ばしい。講演とは貴重な他人の時間を取ってもらうことであり、時間超過は決して良識のある研究者に許されるものではない。次に internet 環境を整えることを要請した。特にアジアからの参加者が多いことを予想して、端末には日本語、韓国語、中国語、ロシア語のフォントを install することをお願いした。端末室の右半分のパソコンには日本語フォントが install されていた。無線 LAN もあ

りほぼ満足できる状況であった。さてポスター会場は広く企業展示も予想をはるかに越えた数であった。そのため財政的にも余裕があり、ポスター session 時にはビールやワインがふんだんに提供された。やはり飲みながら物理を語る醍醐味は何ものにも代え難いものである。朝昼の Tea Break ではケーキを含めたお茶菓子もふんだんにあり、今回の会議はとても和やかに進化した。会議開始後4日間は青空に恵まれケアンズの快適な冬を心行くまで楽しむことが出来た。金曜日、土曜日に excursion が予定されていたためか、会期中に会場を離脱する日本の若者もトリエステの場合と比べてそれほど多くは無かったように感じた。

IAB 委員の一人が他の国際会議掛け持ちの招待講演で3日目から不在と言うことで IAB の会議は異例とも言える2日目にせざるを得なかった。さらに複数の IAB 委員が座長になっている関係で12時から14時の間にすべてを決定する必要があった。VUV-15の提案は既にアメリカ New York, フランス St Malo, ドイツ Berlin の3箇所が提案されていたが、直前になってアメリカ Madison からの提案があった。IAB の冒頭で締め切り後の第4の提案の説明を許可するかどうか審議し、順に4提案の説明を受けた。組織委員長は OHP のみ利用可能としていたが、3年前の IAB の時間ゆとりの無さを考え IAB 委員長としては ppt プロジェクションを可能とするよう要請しておいた。会議の1週間以上前にすべての IAB 議題等を ppt で準備してこれを用いて IAB を進めたので予定の2時間を5分オーバーするだけですべての予定議題を議論できた。これが OHP だけであったら全く不可能のことと、ぞっとした。ちなみに ppt 使用者には1時間前からプロジェクションの test を可能なようアレンジしておいた。

IAB の会議は4提案の説明各10分づつで始まった。10分を越えそうな説明は議長の責任で打ち切った。説明者全員退出ののち議論と投票に移った。米国が外国人の visa 取得問題を抱えている深刻な問題は当然に投票結果に反映された。第1回目匿名投票で米国が落ち、ドイツ、フランスが同票であった。ここで残された提案代表者以外は席に戻り2回目の投票に移ったが結果は1票差でベルリンと決まった。組織委員長は Prof. W. Eberhardt 氏、また今回で退任する菅の後任の IAB 委員長の選任の投票を行い、Prof. Bernd Sonntag 氏が Prof. P. Johnson 氏を抑えて選ばれた。IAB の secretary は P. Johnson 氏の名前が挙がり、満場一致でこれを承認した。Prof. Lewis より今回の会議の簡単な報告が10分ほどあり、13時過ぎから昼食に入りしばらくの後、議論を再開した。まず今回で引退する6名の IAB 委員の後任の投票が行われた。既に会議の前に IAB の secretary である Dr. Gluskin のところに提案が集まっており、議長である私が ppt で全 IAB 委員名と退任委員名を投影しながら、地域、分野を考慮した投票が行われた。投影なしで行った前回の会議では IAB の場

で初めて名前を提案するという段取りで議論が行きつ戻りつしたのと比べると短時間で終了した。S. Bobashev→E. Filatova, C. T. Chen→S. Svensson, C. Latimer→W. Flavell, S. Suga→A. Kakizaki, Z. Xinyi→L. Sheng, A. Yagishita→S. Kosugi の6名が新たに3期9年の任期についた。なお同じ国からは4名以上の IAB 委員を出さないこと、分野のバランスも投票結果後に考慮することも合意された。継続委員は K. Seki, W. Eberhardt, E. Gluskin, A. Hitchcock, V. Ivanov, P. Johnson, F. Larkin, G. Margaritondo, P. Morin, J. Nordgren, S-J. Oh, P. Perfetti, E. Shirley, B. Sonntag, P. Woodruff 氏の15名であり総勢21名の IAB となっている。ついで IAB の新名誉委員として3名の名前が挙がり審議の結果 K. Kunz と J. B. West 氏を追加することが決まった。

今回の会議の正式登録者数は418名で前回の469名よりは減少している。これは航空運賃が高いためヨーロッパからの参加者が少なかったためである。また直前に Spain で超伝導関係の国際会議、また直後にドイツで強相関電子系の国際会議があった事も影響している。登録者内訳は日本174名、米44名、地元豪州40名、独29名、台湾26名、伊14名、スウェーデン12名、韓国12名、英12名、中国9名、仏8名、カナダ7名、スイス4名、フィンランド4名、ベルギー3名、アイルランド3名、蘭3名、露3名、タイ3名、ブラジル2名、エストニア2名、1名参加はチェコ、ギリシャ、イスラエル、シンガポールである。日本からの参加者は平均年齢が若いのが特徴であり、今後長期にわたって真空紫外物理の分野での日本の若手研究者の活躍が期待される。日本人研究者の口頭発表も随分上手になった。ただ聴衆を向かずになされた講演と、質疑に移ったときの質問に対するヒアリングの弱さが気になる。これほど日本人が多いと、ポスター session で英語で説明するか日本語で説明するか迷うのであるが、外国人が近づいてきたら即英語に切り替えるくらいの心がまえは欲しい。

Banquet は多数の参加がありやむなく2会場に分かれざるを得ないと言う事情はあったにせよ、料理、お酒とあらゆる点で素晴らしいものであったと思う。過去日本以外で開催された幾つかの VUV でバンケット料理があっという間になくなることを経験したが、今回は最後まで美味しい料理が残っていたようであり、また多少開始が遅れたとはいえ定時にきちんと終わるなど、前回の VUV で banquet のあと宿に帰り着いたのが午前2時などという過酷な schedule を避けられたのも組織委員長 Prof. Lewis 氏に負うところが大きい。

最後に IAB での majority 意見は電子状態を研究している限りでは VUV も X 線ももはや境界は存在しないと言ってよい。今後の本会議がますます急速な発展をすることであろう事は予想に難くない。日本の若い世代が国際性いっぱい活躍できる日の来ることを祈念しながら9年間務めた IAB を引退することとする。